

パーソナリティとパフォーマンスについての考察

立命館大学応用人間科学研究科
臨床心理学領域

本研究は、人間を形成する要因であるところの遺伝子と環境、そのバランスを調整する目的で人間の遺伝子的つまり生得的な資質に着目し、行動主義のSR理論のS(刺激)とR(反応)の間に仲介変数O(認知・動機付けなど内的な活動)を想定し、さらに動機付けや反応の違いの背景にパーソナリティの違い(特に先天的な気質)があるものとし、それらの仮説を検証し、考察を述べるものである。具体的には、リスクテイクな状況下での行動選択、つまりメリットもデメリットもある課題(A群)とメリットもデメリットもない課題(B群)のどちらを選ぶのかということと、その実験の結果と、性格検査(TCI、NEOFF1)の結果を組み合わせるものである。実験の結果として、まず、A群B群がほぼ半数ずつにわかれることと、最終的に得点のあがらない個人がないこと、つまり、人間は最初から最高の成績をあげるのではなく、なんらかの動機付けを得て成長していくという特性を持っているということがわかった。また、B群は、ノルマを達成できる能力を有しているにもかかわらず、性格的な特性のためにリスクを回避するような選択肢を選んでいると考えられた。実験とNEO・TCIの2つのテストの結果からは、A群を選択する個人は協調性が低い場合が多く、また、情緒安定性が高い(情緒不安定という意味)もしくは損害回避が高い場合が多いということがわかった。NEOの高情緒安定性とTCIの高損害回避は同時に示されることが多く(高Nの80%が高HAを示している)、この2つの項目の関連性を示唆された。このことは、自律神経の不安定さとセロトニンの欠乏が関係することからも裏付けられる可能性がある。こういった特徴を持つ個人は、情緒が不安定であるために現状に不満を抱きやすく、満足を求めるゆえにより多くを得られるような選択をするのではないかと思われる。また、こういった特徴をもつ個人には男性が多く見られる傾向にあった。これは、男性が自立を推奨されるという日本の風潮の中で育っているからとも考えられるが、男性性と自律神経系には何か関連があるという可能性も考えられる(女性ホルモンであるエストロゲンとセロトニンには関連があると言われており、女性は男性と比べて一般にセロトニンの分泌量が多くなるため、翻ってこういった結果になったとも考えられる)。しかし、情緒安定性が高いからといって必ずしも協調性が低いとは限らず、また、情緒安定性が低いからといって必ずしも協調性が高いとも限らないなどパーソナリティは複雑であるので、人間の全貌について理解を深めるためにはさらなる研究が必要であるといえる。